滑稽雜談

巳上

特別
へ5
6326
7

滑稽雜談巻之七目錄

夏　四月部上

初　夏　異名
苦菜秀　靡草枯　麥秋至
月　立夏節　螻蟈鳴　王瓜生　蚯蚓出　和名
二　四月　異名
同　短夜　卯花月夜　清和天　梅天
四　更衣　四重　草物
五　孟夏旬　扇を賜　貢氷　素麺
三　小滿節　卯花降　袷
月　大神祭
七　稲荷祭
月　虎杖祭
八　松尾祭
月　杜若祭
十　梅宮祭
月　筍祭
同　八瀧祭
十三　多賀祭
同　大津賢木入　十五　廣徳祭　立竜祭
十六　水屋能　井の
同　山濤祭
夏經　夏書　夏部
同　佛誕日　灌佛　素麺　乾石飯
十七　戒壇堂開帳
同　清水祭
十三　神衣祭
十五　日光祭
同下　雜賀祭
十三　蹴供養
同　吉田祭
月　祇園祭
九　平野祭
月　當麻祭
十六　山濤日使
同　擬階奏
十九　絵夏　安居　夏籠
十一　鳥羽祭
十四　千團子
十六　白列八幡祭

A5
6326
7
D101841387789

廿六 向日祭　廿七 久我祭　同 加茂御生　廿六 葵文祭
同 加茂國祭　同 加茂祭競馬圖　廿九 関白加茂詣　卅 日吉祭 未申供
廿三 葵祭　廿六 中山祭　同 御霊祭　廿七 如法経會
同 高野もも供　廿八 的弓　廿九 新日吉祭　同 三枝祭
四十 古婚會　同 太秦祭　同 大津早尾祭　同 祭 林しるる忘行さも
四十三 矢數

京都帝國大學圖書

滑稽雜談巻之第七

夏之部

四時堂其諺編録

○夏 ○礼記曰夏之為言假也養之長之假之仁也 注 假大也 ○前漢律暦志曰夏假也物假大乃宣平 ○後天文志曰日行南陸謂之夏 ○和訓義解云和語に夏となつと訓ずるハあつしなりあつしとあしと通ふ也又暑熱の気と云也

異名類　朱明 ○尓雅曰夏曰朱明 郭璞云気赤光明 赤帝 ○文耀鉤曰南宮赤帝其精朱鳥　朱夏 ○梁元帝纂要曰夏曰朱夏　炎夏 同上　三夏 同上　升明　長嬴　農節　纁夏　瓜時　盛夏　炎節　昊天 上二名纂要出　朱炎　朱律 以上凡ノ夏之異名

水谷歌合 夏 永縁百首
うちひさのひかりとはふれ時津風さそふあたりに南まさる　宜胤

○立夏 ○卯月の節也 ○素問注云立夏節初五日螻蟈鳴次五日蚯蚓出後五日王瓜生 ○七立夏ニ三候之

△螻蟈鳴　○礼記月令曰孟夏之月螻蟈鳴○雷敦炮炙論螻蟈即夜鳴腰細口大皮蒼黑色者○毛詩草木疏蝈蟈の一種の俗云あまつゝの形あり

△蚯蚓出　○礼記月令曰孟夏之月蚯蚓出○時珍本草曰蚓之行也引而後申其螻如丘故名蚯蚓亦雅謂之蠥螾巴人謂之朐脰皆方音之轉也東方朔虬賦云乍逶迤而鰭曲或宛轉而蛇行任性行止擊物便曲是矣術家言蚓可興雲又知陰晴故有土龍々子之名其鳴長吟故曰歌女子沢亭壊地中有之孟夏始出仲冬蟄結雨則先出晴則夜鳴或云結時能化与百合也与蟲蠡同穴為雌雄故郭璞云蚯蚓土精無心之蟲交不以分雌干蟲蠡是矣○和訓栞解云みゝず日本紀の鵜葺草葺不合尊の産の時に出雨降の初に鳴の意なるべし

△玉瓜生　○礼記月令曰孟夏之月王瓜生注王瓜草挈本草作菝葜音同謂之瓜者以根之似也○朱氏曰王瓜色赤感火之色而生○はこさび月令集解に引く

○小満節　○芒月の中なり　○素問注云小満節初五日苦菜秀次五日靡草枯後五日麥秋至○芒二候なり

△苦菜秀　○礼記月令曰孟夏之月苦菜秀○朱氏曰苦菜味苦感火之味而成○陸機云苦菜生山田及沢中是苦荼也○荼の形あり

と秋七草の苦菜又天香菜或は苦蕒とも云ふ

△靡草枯　○礼記月令曰孟夏之月靡草枯注靡草草之枝葉靡細者陰類陽盛則枯死○補大石五雑組曰靡草蘐蔺草藶之属非一草也蘐蔺似人參冬水而生夏土而死

△麥秋至　○礼記月令曰孟夏之月麥秋至注秋者百穀成熟之期此於時雖夏於麥則秋故云麥秋也○蔡

○邕月令章句曰穀以其初生爲春熟爲秋故以孟夏爲秋

○和国に[illegible] 夫木八 [illegible] 隆祐

○四月

四月之部

異名

孟夏 ○月令曰孟夏之月

除月

余月 玉燭宝典

正陽月 ○西京雑記曰陽作用事和気皆暢達已之月故謂之正陽

乾月

陰月 四月純陽用事恐疑其無陰故以見（四月特謂之陰月）

文選 ○爲日純陽爲乾

陰気不絶也

清和 維夏 踰蹟 六陽 新夏 早夏

仲呂 ○律暦志曰仲呂四月律也言微陰始起未成著於其中旅助姑洗宣気齊物也位於已在四月

和名 卯月 ○清輔奥儀抄云此月卯花さかりなる故に卯月といふを略せり

卯月 秘蔵抄 卯月とて[illegible] 源宗于

卯花月 童蒙抄 [illegible] 鴨長明

花残月 同 [illegible] 為忠

得鳥羽月 同 夜の[illegible] 為家

[illegible]月 秘蔵抄 [illegible] 家持

夏初月 初月 [illegible]

○卯花降 [illegible] ○八雲御抄[illegible] 今案

○或説[illegible] 作者未詳

万十 春去者宇乃花具多志吾越之妹之垣間者荒来鴨

同十九 宇乃花乎令腐霖雨乃始水逝尓縁木積成将因児鴨 大伴家持

○短夜

十分夜三十八剋三十分 ○月令廣義曰夏至節昼六十一剋三十分云云

○[illegible]夏の夜と[illegible]

[illegible]

○夏の夜　短夜とも云ふ　[illegible]

○卯花月夜　○蘆垣の云卯花の白妙の月夜の[illegible]　○秀吟

万葉抄曰五月は卯の花の月なり　万十　五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鴨

○梅天　○杜詩曰南京犀浦道四月熟黄梅　作者未詳

又詩曰梅天一雨清　○或云梅天は三四月也　○是は[illegible]

○清和天　○古詩云簾纖細雨正梅黄景尚清和

風自涼　是は初夏の天氣と云ふ

○更衣一日　○先代旧事紀五十八曰四月一日天皇衣羅綾厚紋之単衣及直裝襠袴諸王三公九卿諸司皆着羅紋花紋之単服其直裝自重也順天気之正節而与正道正裝○礼記月令曰孟夏之月天子始絺注絺葛布之細者○延喜式掃部寮云凡四月一日撤冬座供夏御座○建暦御記曰清涼殿在御帳間御帳四面有几帳帷夏生絹以朝粉盈葦雀○[illegible]

[illegible]

蒙六上簡屏蒙小上簡屏多[illegible]

新古今　[illegible]　拾遺天皇

△白重　○清涼殿の[illegible]　○或記云[illegible]卯月

[illegible]

一日うちのせと用ゆるを下少袖と云を是と云ふ○上賀茂日記
帳子と用ゆる浄きは八幡と云を一重ねと帳とつくる
俗説や八月十五夜綿入る生絹と用ゆ九月九日綿乃ち変色と紀事
衣も菊重ねも文十月一日うち移り衣と用ゆ色と色の更衣と云
（奥書花はとの人の考へ云ふ人の考へ云ふ）

△袷

衣無裏也○順和名抄曰袷阿波世乃幾沼○先和俗の
あるを文俗は綿ぬきと云ふ月一日うち移り衣と又用ゆ也
初と云ふ四季ともして袷と云ふ夏之綿ぬき又打毎し万葉十二に袷の衣を縫
夫木　夏ごろもぬきもあらぬ物なれば　仲正

△単衣

（ヒトヘ）

八文衣の単ともせり精好の生絹と云ふ也又云ひとへの夏衣紀或
出入門べき○はなれたる人はかなまかしく○是は今日の俗に倍と云ふ者の裏なき衣
四月ばかり用ゆ是を云ふ夫部也

○孟夏旬一日

○江家次第曰其日平旦掃部寮女官上紫宸殿御簾子縣帳帷壁代裏書云壁代冬旬用之内匠寮立御障子掃部官人立整御倚子於御帳内今日王卿出居并侍従等皆著靴頭蔵人注殿上侍従見参於階下給外記如節會時冠出御南殿次開門次開司奏次監物奏次開門奏官陣作法如常奏有内覧次出居次將王卿出居侍従著座次舁御臺盤進物次次將御饌采女立御臺盤次供御四種内膳供御料所毎物有羹進物所供也次賜臣下四種次供索餅次賜臣下次御箸匙之臣下隨下箸次厨御贄次供鮑御羹次供御飯次給臣下次供御菜物并御汁物次給臣下供御酒一献次酒番勧臣下次下物下器一献畢内堅四人各持下器一枚炊吏一枚堅魚一枚著茹物一枚相加堅魚干鯛内堅受取之次供御菓子干物次給臣下次開左掖門開司奏次六府番奏此間供御酒次少

（炎文作者有　うちとくとも是のものこそせぬきうちけひとすす蜂の羽衣　経茂）

納言庭立奏因門次左右近衛発乱声遙奏音楽舞等（楽人舞人皆近衛官人也、挿頭、呉竹右敦冬、今日御遊有者出居召琴云書司御手琴新侍式云、瑟宇多法師）次大臣奏見参目録退下列立庭中天皇還御○その根原四月条

天子夏冬の事九月条に見るべし冬は下御酒とて冬きて夏の旬に中宮の御方に東宮あり遠く移り給ふ時の事なり

とあり但しつせ河ひて時々なるのみ移り給ふ

年移りを以朔日の旬とす夏のみ有り移り給ふ

夏の旬とあるやはり夏冬のみ二度の旬とも也

○礼記月令云孟夏之月天子迎夏於南郊還久行賞封諸侯慶賜遂行○考異

中華は有る時は諸侯に賜ふ

△扇賜 月日

○江家次第曰暑月給扇十月給氷

奥給扇義内案未奏前内侍取入扇、楊筥蓋出御帳東北坐東御屏風南妻出居次将進取之立王卿堂盤北頭片手取筥片手取扇班給賜者把笏起座更拠之給之取之

訖王卿共有悦并（東書云出居次将旬次将出居大将勤仕出自本陣之故）○會典礼部節令曰凡端午節文武百官俱賜扇并五彩壽絲縷大臣及日講經筵官或別賜象牙麈扇并絲縧艾虎等物

○その根原四月条の扇のあるべしいしに因りて今の旬の式絶量て陣の座にて手ずから行給る事中絶

年中行事

行会　侍人の作る神まつりの扇とのみなり

△貢氷 月日

○延喜式主水司式曰凡供御氷者起四月一日尽九月三十日其四月九月日別一駄（以八駄准一石）二斗五月八月二駄四顆六七月三駄進物所冷料五八月二顆六七月四顆御醍醐酒并盛所冷料六七月一顆凡運氷駄者以傜丁充之山城國葛野郡花園氷室一所愛宕郡小野一所栗栖野一所土坂一所堅木原一所同郡石前一所大和國山邊那都介一所河内國讃良郡讃良一所近江國志賀郡都花一所丹波國桑田郡池邊

一所牽駄丁給食一人日米四合五撮駄別秣稲二把捴計所須毎年申省請受氷標幡十二流各長二尺料絁帛八尺

熱くして夏月より秋まてなく氷をつかふ今日より始る也氷室の説六月朔日の条に

奉 待えたる夏の氷のあしたかな 為れ

○青簾 日日

○簾垣なと云青簾の簾とは翡翠の簾より出る名

一日あさましき小簾に挿まく ○此後は更衣小消息の翡翠簾を挿つ也といへり

又説夏山の翡翠あるに云ともいへり捨へりん

○郭蔽与簾匝也 ○晋東宮舊事曰簾箔皆以青布縁純 ○釈名曰簾廉也自楊雄方言曰宋魏陳楚謂之笛自関西謂之箔南楚謂之蓬箔 ○順和名曰野王案曰簾編竹帳也 和名須多礼 和訓

義解四季のものなき無るの也

○初夏古詞曰簾纖細雨正黄梅景尚清和風自涼 ○又暖暮時簾なとは孟夏の天気を云

へり夏山の簾とまた簾と云まれ申せりや

○虎杖狩 一日

○雍州府志曰洛北市原南在連理芝處卯月一日上賀茂社司諸貴布祢社帰路採席杖於此芝其所採之席杖大小多少互争競以与戯謂之虎杖狩

○此説得れとも神るともいへるまたなや

○筑摩祭 一日或初午日

在近江国坂田郡所祭御食津神

○神社啓蒙曰筑摩神社 ○文徳実録曰仁寿二年三月甲戌近江国筑摩神授従五位下 ○按筑摩庄大膳職御厨之地也運送色目載在延喜式故以当職所祭之神祠此地欲蓋此神依掌稲食而里女為婚則祭祀必戴釜鍋奉神矣不幸於少壮之間為孀也則不得已而改嫁焉再嫁者用二枚三嫁者用三枚候神幸之後也中世倣業平之花詞里婦鬻笑壓重数枚為艶態之故也固可芦胡也哉 啓蒙

○八雲御抄四にはへい酒の鍋といふは筑摩の祭男の

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

拾遺集　[illegible]

○大神祭　二月日

和國城上郡所祭之神一座大神大己貴神○神代巻云大己貴神之幸魂奇魂今欲何所住耶對曰吾欲住於日本國之三諸山故即営宮彼所便住而居此大三輪之神也○延喜内蔵寮式曰大神祭便寮允一人史生二人仕丁一人近衛将監一人馬寮允一人馬部一人衛士二人御馬十疋右件祭夏四月冬十二月上卯曝備幣物前二日使等依時進発冬祭前一日其使官人以下當色雑物並同春日祭○二十二社注式曰大神祭五十九代宇多天皇寛平九年三月七日勅享○[illegible]

[illegible]

[illegible]

○稲荷祭　四日

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

宗信
法眼

[illegible]

○山科祭 上己日

右夏四月冬十一月並上己日祭之預前裳倫幣物使等進発 幣物并使等装束 延喜式往見

平十年[illegible]

○或説云四事中紀四日本武尊[illegible]

○神社考云俗傳宮道氏之先出自守屋大臣其後世居摂州蟄川者又冒蟄川姓

○延喜式藏寮式云山科祭云云

[illegible]

○平野祭 上申日

木神 日本武尊 源家氏神茅二久度神 仲哀天皇 平家氏神茅三[illegible]

[illegible]神 天照太神 大江氏神茅五縣

神天穂日命 四姓 中原清原秋篠氏神

○江次茅曰平野祭 延喜格曰延暦年中立行社大政官式云凡平野祭者桓武天皇之後王及大江和等氏人并預見参花山院寛和元年四月十日甲申始有平野臨時祭

○二十二社次茅云平野茅一今

[illegible]

参入相揖率着神殿座上卿弁以下五位以上若与氏人者先奉幣後着神祇官率御炊女四人於東門弾琴歌舞以迎山人 西宮抄云以左右衛士為山人 山人廿人左右相分机賢木立机前申祝詞炊女四人受賢木復座給酒肴於山人立薪祭場退出次供神膳先今木次久度次古開次相殿比賣内侍奈進可供之工卿宣蠶木綿給大蔵給木綿史生給諸司次北屋神主讀祝次南屋神主讀祝畢神主拍手

次牽廻御馬次引諸家馬次雅楽寮令持御琴渡於東屋
供奉神楽次掃部寮舗倭舞座於南屋乾角歌舞間燎庭
火次舞此間所司盃饌次三献一献拍手飲之三献下著
云云外記進見参文上卿見畢召近衛府将監給之大蔵省
積禄綿男料三百屯女料二百屯○又曰臨時祭儀早旦御湯殿依神
事内蔵進新御帷時剋出御陪膳四位褰御簾五位蔵人
奉御笏次献御贖物次宮主入自仙華門跪於長橋北河
竹南獻御麻頭取之獻主上主上一撫一吻返給宮主給
之次使者座次宮主奉仕祓詞次使取幣立案前次主上
再拜畢使置幣退出次入御○今年根屋貢献の条孔と始行
せらるる上卿辨内侍参議の時盃ひらく見参を以て申さしめて奏せ
時の条所々の名結の名人侍ことごとく参る御遊あり出幣年と実成
の除目乃年紀たるべし除目の条寛和元年四月十日の除目の使たる
相伝家系惟成

○松尾祭 上酉日

神社啓蒙曰松尾社者在山城國葛野郡去王都西南二里餘所祭之神二座大山咋
神 舊事本紀云此神者坐淡海國比睿山亦坐葛野郡有二
松尾神系圖云素盞烏尊孫大国御魂命子也 南殿
社奥 氏成私記云別當苗裔神也○二十二社註式云
市杵島姫也今拳兩荒 大中臣定好松尾鎮座記云元明帝
和銅二年四月十一日山城國山田庄荒子山於賀茂初
奉傳云且造殿者文武帝大宝元年始於秦都理注式○江
家次第曰松尾祭上申天平二年預大社著貞観始祭之當日早旦山城國
司一人率郡司等参候弁史生官掌等着行事所屋
盃饌内侍已下來就東門北腋舍屋當中門前之案一基
神祇史以幣帛二裹令授神部置案上祝祢宜進執幣入
内殿奉之次祝祢宜率神部等頒給奏鼓祝給女官祢宜給弁以下此

間着饌三献弁宣御飯早速給大膳属起立申云御飯早速給畢諸司拍手三段酒觴三行後拍手一段訖各退検非違使設渡船 ○今ハ根原村ニ丸世某上の酉日や神事廻りの始まりや此社の元く弟代ハ上の酉の日に勅使参りぬ給ひ今世ハ絶ゆ此神の氏子村郷多し此村ニ祭り更に祭礼と済せり ○此神事神輿ハ七基の内根本祇園と称し出雲秡の神事ハ神輿の御幸を桂川に渡し出る此秡 太石神

○杜本(モリモト)祭 上申日

年中行事 二座共に杉尾山の… 貞世

○神社考曰杜本當宗此二社共ニ在河内國仁和五年四月初祭之宇多帝外祖父姓當宗氏 ○延喜内蔵寮式云杜本祭云右四月冬十一月並上申祭之預前裝備幣物等使等進発 幣物并使裝束見式 ○公事根原曰河内國に…祭る神社之午日使ハ… ○今世此神社は… ○考るに此神社…

並河氏の撰する所又河内志にも見えたり

○河内志巻四云杜本神社二座並名神大月次新嘗見観元年正月授正四位下公事根源曰仁和五年四月始行祭礼 在古市郡駒谷村一座称山神一座称水神式属安宿郡云云 太石神

○當宗祭 上酉日

○世俗淺深秘抄曰寛平法皇御外祖母氏神在河内國所謂當宗社也仍自仁和五年敢祭之或説曰実御母伴中野親王女班子女王 同神社考

○延喜内蔵寮式云當宗祭云云右夏四月冬十一月並上酉日祭之預前裝備幣物社本使便参幣物以下見式

○公事根源曰午日使ハ杜本當宗ハ社に参さ一人の使あり社へ参向すと見えたり ○當世は祭も絶く御座す神社ハ今国府の西社あると云ふ事

○同河内志巻十四云當宗神社三座並大月次新嘗 在志紀郡誉田村北王水町當宗垣内寛平五年四月七日始遣河内國志紀郡當宗神祭幣帛使國司一人専當其事並用國正税

永為恒例見公事根源

○當麻祭 同日一西日

○神社考曰當麻此神社在大和國四月上申日祭之○或記曰大和國葛下郡當麻都比古社二座當麻山口神社此社欠○日本紀曰用明天皇皇子麻留子皇子當麻公之先也○延喜内藏寮式云當麻祭云云右夏四月冬十一月並上酉日祭之預前曩備幣物使等進発見式○はるとあるは紀伝のまゝ

○梅宮祭 同日

葛野郡去王城西可二里所祭神四座相殿神四座酒解神大若子神小若子神酒解子神已上○當社記曰件四社以孝謙帝天平宝字年中祭此地所謂酒解社大山祇大若子社伊弊度遇神主遠祖加夫良居命也小若子社同弟也酒解子神木花開耶姫也其後人皇五十二代嵯峨天皇后姓橘氏諱嘉智子父清友少而沉原渉猟書記眉目如畫為人寛和風容絶異天皇初為親王納后竈遇日隆天皇登祚弘仁之始并為夫人後立為皇后然常以無太子而凄々不樂因茲皇后憑神代幽契祈酒解二座神矣一旦忽感有妊孕遂以當宮清砂敷御座下居其上生児所謂仁明天皇是也天皇追神恵嘉祥季中以外祖父清友并酒解子社又以瓊々杵火々出見命配若子二社以為橘氏祖廟也至今尊崇異他夏冬祭祀無怠耳世人望産月則必取當砂社佩帯襟此遺風也 貞観式云梅宮神四座夏冬祭料同平野祭 三代実録云陽成院御宇元慶三年四月二日停梅宮祭同八年四月七日始祭是橘氏頃年間停祭今勅始而祭

六十六代一條院永延以後祭不絶（上社記）○江次第曰
當日弁以下着行事所屋盃酌并肴饌如常上卿参入着
座弁着座山人候南門外御琴師御神兒等迎之盛酒者
於高机在門内申鎮神詞畢御神兒二人進受貫木着本
座次琴歌發声次御神兒舞次賜酒希於神兒等内侍供
神饌山人乞右相分立薪庭中而退出上宣賜縵木綿丞
唯出賜之畢上卿以下着座神主申祝詞上卿以下拍手
三段左右馬寮允各一人立御馬前巡社曲度次山人燎
庭火於東西外記以見参禄法覧上卿大蔵省積禄於庭
中次吹歌御神兒舞次和舞山人神主神祇侍従内舎人等讃宣御飯坐
楽給録申云御飯多々良加介給畢上卿以下退出○么
年根源云菜所中ハ初ハ内侍ハ内侍ハ橘氏の役ハ也宣の一の人乃家ハ橘氏の
役家の人乃多役ハ社ハ役ハ橘氏の
役ハ役ハ買物の取役ハ氏の爵の役ハ氏の爵の役ハ（花山院御宇寛和の比）

中園西園寺ハ藤原氏の役ハ也宣命ハ宣命ハ
中乃園西園寺（在衡）ハ西園寺氏の役ハ（道長）
中ハ中納言橘澄清の役也中園ハ
氏の家ハ氏の家ハ役ハ也○
ハ絶役ハ也社ハ奉の文ハ
源爵ハ文の左衛ハ小社ハ
年中行事 神ハ知の御社ハ梅の家ハ
○八講祭 三月日 ○清水八講ハ家ハ二月日社一月八王子の御社天満 秀長
天神二月 ○雍州府志曰世傳菅神少年日入睿山法性房
室学文書往来之次胡此村因建社祭之○一説云菅神左遷の後
天下ハ源と敵ハ二百年の家ハ歩行ハ不快の役ハ手ハ眞と為ん
為ハ家の動為ハ為ハ西代ハ形ハ無家ハ家ハ無二基と
郷人十人競ハ紙花紙ハ花紙ハ社ハ場ハ競
也ハ度社裏ハ文ハ傳ハ神華ハ役ハ

○多賀祭　中午日

○神社啓蒙曰多賀大社在淡海國犬上郡所祭之神一座伊弉諾尊○神代巻曰伊弉諾尊功既至徃市大矣於是登天報命仍留它於日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也近江在艮方日之所初出也故曰日少宮○はつかの月

○山海日使　三日

卅日三日是一郡万代之勤役也自松崎辨備云臨晩陰有日使相列来自山崎之孤村伐式同于京洛之大臣隨身策馬其蹄如竜雜色装束異形飾新也爰主人冠用掛紫藤嬬娜舞男巾子挿素櫻而婀妍彼等乍騎馬三般先廻神庭令下馬一面相對御殿各刷再拜衣袖○山崎離宮日使神事記云貞観二年庚辰二月九日夜兩輪耀出現於離宮一輪遷座于男山依之勅使木工権頭従五位下和気朝臣範同卅日遷宮今日使其儀式也日使者八幡宮才一神事也治承三年猶有勅使之儀同四年依乱退轉之刻芥賣瓦屋周戸院成下勅裁在地神人勤之然間文野土民為御先之役号須弥寺白杖捧之出自鳥羽木津者年頭馬長也神巫舞人次第司蔵人司先行邑常人吹笛打鼓又細男云有兩人形是則武内高良兩神也○

○八幡宮寺年中須記云日使

明月記曰建仁二年四月三日山崎民家悉経営有毎年
祭礼其路渡橋播广大路参八幡○此祭礼往昔ハ物役なし
作るゝ後は祭の神人と根本生涯の神人と号して無役と称る
年中なん作りは中世以来無役の民終く解怠ひしに中今世解怠の民
もなくなりけるやうに世を少作るを上より示給のおもく行粮料なく出る時
なん八幡の宮下を大河の橋とそしけるとなん今の橋なをのき流る此日の役
を勤るを日の所と移を作るは所人千石千貫と賜ふ命といふは所を
勤しなを日の長なるを一郷の工商とも長なるを商のなを長なるを

○大津賢木入 三月

八月十六日宮の御代として厳心なる出ると中しこの大津の舞こう
大勢参りて此賢木をとりて大津八人すなわち賢木の物役は宮と御
しなを移を長と又同月中中日御幸宮社此すなを往昔大津の言しと中
なる天智天皇の御宇日吉の大神湖南を現形御りしてつねは比叡山
の林下は孫を孫を孫なる大神琴の出給宮志賀は繞宣して海辺毎年今家
と宗孫との御ひきは中宮は伝くる大津なる御榊を作くるなる是往昔日吉神大津
なる心也神幸の儀式は是なる大津と中人の神人なる則多孫の總政所と大津
中宮宮を生る神人の長なると云總て宮月の多年と御梁に或ハ以後之無況
の御宇物あり〻起久年中は始く此蔵と称て大津と孫と
大賢木と号て作る或云神社祈蒙なる比宮の社日吉孫賢木蔵と云ハ非
なる賢木屋と云齋敬今作なる日文の神友總所を設中古件の儀式終く
賢木と宮の物役小入なる之面世は知くも件の賢木ハ対の大屋作なを者ハ
此無論なる大津の舞と往還の孫人或ハ牛面の家面まと金銀之金銀木綿はかき
を神物の最宝と称く神宝孫用は宮なる中神威と備く榊物と振ひなる今と
なる宮なる大賢木此社中海辺の社宮往来のなる賽銭とる

○廣瀬竜田社四月

大和國廣瀬郡廣瀬里即竜田社相隣之所也所祭神一

○神社啓蒙曰廣瀬社者在

座和賀宇賀乃賣神○日本紀曰天武天皇四年四月遣小錦中間人連蓋大山中曽根連韓犬祭大忌神於廣瀬河曲○神祇書云件神伊特諸伊奘並尊子豊宇賀乃賣神神祇官坐御食神是也○日本紀云天武天皇治五年夏四月朔日祭竜田風神疾瀬大忌神云云同年七月祭如四月例○簾中鈔云四月四日七月四日云云○啓蒙曰竜田社者在大和國平群郡所祭之神二座天御柱國御柱神○神代巻曰伊奘諾伊奘並尊共生大八洲國然後伊奘諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉乃吹撥之気化為神号曰級長戸邊命亦曰級長津彦神是風神○日本紀曰天武天皇治四年夏四月遣小紫美濃王小錦下佐伯連廣足祠風神于龍田立野○伊勢皇太神宮旧書曰山谷水変成甘水浸潤苗稼得其全稔故有風水祭名曰柏流也豊年浮流也沉覆四月七月祭之号大忌祭

是也○筆相原口は或社に有和歌まあり此日小歌物語の事に二度行る役者の日記に○は夏の季より用の事

郭象 ひとけくつひも多そ[illegible]

○水屋能 四日又日

屋社と移せる事は赤之在貴一条嘉吉年間の御宇殿舞の事さかり給ひ曲と云事多給ひ給ひ陳殿の事と云事曲の義給ふ中楽の能舞○毎年の事と水屋の能と云

数聚国史 書曰水屋の神は生活の神なり神はまた身とよむる

○擬階奏 七日

冊と二省式部卿の奏関白の義之列侯短冊の内に見もの

る人半果くぬ[illegible]と短冊とすれ[illegible]

○は擬[illegible]擬階[illegible]と加[illegible]

[illegible]の奏文の史[illegible]

○山崎祭　八日

丑山崎神預之名神○延喜式曰山城國酒解神社一座
注云示号山崎神○神社啓蒙曰山崎神社在山城國乙
訓郡山崎所祭神一座大山罪命○神祇拾遺曰山崎神
者大山祇命也即離宮左殿祠焉○明月記曰建仁二年
四月八日午時許参上水無瀬殿未剋出御此邊辻祭二
社天王社酒解社被渡御前其中一方頗副田楽等供奉土民等
毎年営此事○山崎と俗に童使と云ふの面代式二社と天王八王子と
相一面と天神八王子と相ともに天王と宗盛島ゝ書老元○日月
八日神社記曰今日多武天王と酒解神と合と多武と童使と
云ふ也神記曰の儀式なと云ふ多武は形のごとくの祭儀也

○佛誕日　八日

甲寅四月八日中天竺浄飯王妃摩耶氏生太子悉達多

○佛祖統記云周昭王二十四年

成無上道号曰仏世尊○大集月藏経曰以精進故居兜
率天宮観其時節捨彼宮殿正知了了而入母胎以精進
故於藍毘尼林從母右脇安詳而出以精進故行七歩已
震動大地及諸山海以精進故受彼難陀及婆難陀龍王
兄弟洗浴○十二遊経曰四月八日明星出時身長
一丈六尺生○釈氏要覧云广河利頭経曰佛告大衆十
方諸仏皆用四月八日夜半子時生所以者何為春夏之
際殃罪悉畢万物普生毒気未行不寒不熱時気和適○
適生八歳云引玄樞経曰二月初八日乃仏生日也周建
子以子月為歳首是以十一月為正月也莊王九年四月
初八日釈迦生者不考歳首建支猶以四月為歳規何其
謬欺○年代撮要曰周出異記ハ周莊王ノ時ニ甲寅ノ四月八日ニ
の水泉の流るゝと俗に佛あらゝ川と云つゝ香飾して丈夫の姿と成て西の方に向き
虹のごとくなるなりと帝あり中とをうして大史萇弘中るはずと孝経の萇弘ハ

[illegible]

△灌佛 八日

言世尊若佛在世及滅度未來世中諸衆生云何浴像佛言乃至我今与汝說浴像法諸供養中最為殊勝与衆香湯置淨器中先作方壇敷妙座於上置佛以諸香湯次第浴之用香水畢復以淨水淋洗其像○高僧傳云四月八日浴佛以都梁香与青色水鬱金香与赤色水丘隆香与白色水附子香与黄色水安息香与黑色水以灌佛頂

○浴佛功德經曰清淨惠善薩白佛言世尊若佛在世及滅度未來世中諸衆生云何浴像佛言乃至我今与汝說浴像法諸供養中最為殊勝与衆香湯置淨器中先作方壇敷妙座於上置佛以諸香湯次第浴之用香水畢復以淨水淋洗其像○高僧傳云四月八日浴佛以都梁香与青色水鬱金香与赤色水丘隆香与白色水附子香与黄色水安息香与黑色水以灌佛頂

○先代舊事紀 五十八 曰四月八日天皇推徵諸王諸卿行灌仏會○國史曰仁明天皇嘉和七年四月八日請傳灯大法師位靜安於清涼殿始行灌佛禁中並親王大臣家行之始之○江家次第曰灌佛八日若當神事停止前一日內藏寮官人申藏人可請明日御導師由藏人奏聞依仰定之當日早旦藏人奉仕御裝束垂母屋御簾撤畫御座返燈樓綱□書寮立灌佛臺二脚其南北立黑漆机各二脚南脚置花筥五枚入時花又一脚置五色水口書式云金一色尺迎一体備金銅盤一一枚佛在中間山形二基北重王記云青竜山北赤竜嶺脚置花筥二口入時花

由次出居次將著座次王卿參上各取布施其布藏人所所司公卿殿上藏人申可始事公卿等候殿上藏人申可進膳以下侍臣以上身雖不參皆所進也出納取聚入物蓋臨中期置殿上小板敷前即各取自料置御机也大臣五帖大中納言四帖參議三帖也各以帋四枚裹以白木當中付之木花頗低注其人裹書日上下以細帖帛用錢寛平八年布施法親王大臣五百文大長保五年段紙用銀枚有過差五位四百文中納言三百文參議二百文四位百文五位六十文五位七十文六位十文文扇筆等欲仕意也或用銀枚有過差付之時多付五粽松件布施入柳筥蓋置之次御導師參上

率弟子僧四口著座礼佛次唄散華次導師取御酌以四角水混合於中央鉢次捧御酌作立一度讃歎畢次作立灌佛三度次置酌還座次王卿次王卿次灌佛各跪灌佛一度（山形穴）居合掌礼佛一度退還次侍臣次帯灌佛導師毎人讃歎以祈詞誓願園家廻向畢次給布施（僧紐白大袈裟一領）導師捧而兜願畢退出次王卿次出居退下次童御簾（廂）女房灌之侍臣女房布施物等差出紐手小舎人等送導師房（長櫃召四人）

○年中行事抄曰図書寮俗志曰八月十五日灌仏の法事也又波多子と云とあり

○年中行事抄曰図書寮俗志曰八月十五日灌仏の法事也又波多子と云とあり

○年中行事抄曰図書寮俗志曰八月十五日灌仏の法事也又波多子と云とあり

△井水

都梁香二藿香三艾納香合三種艸香按而漬之此則青色水若香少者可以紺黛素皮椎代之又用鬱金香手按漬之於水中按之以作赤水以水清淨用灌像訖以白練拭之○夢花録曰四月八日仏生日京師十大禅院各有浴仏齋會前香糖水相遺名曰浴仏水○也和俗の井水と称して仏の屋湯のごとく中華にて浴仏水と云也井水と云也用

△青精乾石飯

○禎頌曰経云按陶隱居登迦凡内外諸書並無此字惟施於此飯之名耳又陳藏器本草名鳥飯其作飯法以白粳米舂治斫取一斛三斗用

南燭木葉五斤熬者三斤亦可雜莖皮煮取汁極令清冷以浸米蒸釋炊之 ○時珍曰此飯乃仙家服食之法而今之釈家多於四月八日造之以供佛耳造青又入柿葉白楊葉数十枚以助色 ○皆青精飯を作て佛に供ふ是和俗のまねしたる也

○結夏 八日或十五日

○摩派纂抄云結夏といふハ安居之安居とハ梵語之翻して寂靜と云一夏九旬これ時とせ釈尊成道の後佛母のために忉利天に登りて一夏九旬の間報恩經を說給ふ其を遊籠と云夏を結ぶ日異說あり延暦寺にハ四月八日より入ありてハ十五日より結ぶといふ云々

○元亨釈書資治表曰延暦廿五年四月詔十五大寺及國分寺創安居講仁王護國經立為式云々

數觀立義 出りしもとも安居のまでもる事これ安居けき 基經

△安居

○釈氏要覧曰南山鈔曰形心靜攝曰安要期此住曰居律制三時偏約夏月者一並軍遊行妨修出世業二損物命違慈實深三所為既非故招世譏 ○梵綱經曰若仏子坐禅結夏安居云々

○南海傳曰以四月十六日入安居七月十五日解安居 ○寛印鈔曰道宣師云初四月十六日是前安居十七日以去至五月十五日名中安居六月十五日名後安居 ○是等の說のごとく安居之時又結ぶ和俗にも安居として十月十五日より結ぶもあり是を安居ハ俗に夏となす一しほ於ても其の入一夏終ると一切夏の事を說事之說書ありハ八日の結夏ニ行ひし是ハ和俗に於て在家八日より和俗家文同し

△夏花

○西域記八云菩提樹南十余里聖迹相隣毎歳比丘結夏安居四方法侶百千万衆七日七夜時散香花盛鼓音楽遍遊林中礼拜供養 ○盛裏記九日九旬安居の供も叡山西塔に八也堂より始る云々 ○釈家にも於て行ふ花香と供する事あるハ安居の義之安居於て結ぶへし俗家にても一夏の間花を折て佛に供ふる事を夏花と云ふへし行ふ供花おもくハ樒と用ゆるともあるへしと供ふるを夏花と云ふは甚しき花摘夏にして花を摘て四花之花と云ふ花ハ無句の解にして夏花と摘と云ひ一夏すごの

[illegible]

△夏経 并夏書夏期

○梵網経曰若佛子坐禅結夏

安居常用乃至経律仏像菩薩像常用諸十八種物[illegible]之

○[illegible]

[illegible]

准[illegible]又俗家[illegible]立[illegible]と多[illegible]

烟草[illegible]と一反九旬の間[illegible]

○戒壇堂開帳 八日

○元亨尺書 叡澄伝 澄曰弘仁十

年三月奏允建四宗大乗戒壇其條四科帝降表南京諸

寺詳定建否沙門護命抗表斥之東大寺景深著述方示

正論摘二十八失平城諸利毀唇紛罵十有一年春二月

澄述顕戒論三奏表進博引大乗戒證作顕戒縁起又結

二十八失其詞激切著明上又降其書於南寺々々諸師

並敢間議者○又曰弘仁十有三年夏六月丁有一日右

僕射藤冬嗣捧四戒允許之詔來山中蓋慰初七也○帝

王編年紀曰弘仁十三年六月参議右大弁藤家業可立

戒壇由帯宣旨登山傳教不耐喜悦国六月十二日特下勅

詔創築戒壇十四年四月十四日修禅和尚天真始行受

戒[illegible]淳和天皇天長二年乙巳勅賜近江國稲九萬束同

四年建立戒壇堂葺檜皮五間堂上有金銅覆鉢々上有

宝形壇一基高六尺七寸長二丈八尺廻二丈像壇板敷

長三丈二尺廣三尺安置金色坐像釈迦三尺坐像四色文

殊彌勒二尺五寸○往昔建立時統[illegible]

[illegible]元慶元年○九月十[illegible]

[illegible]長年中[illegible]方[illegible]寛永十

七年[illegible]十二月[illegible]

主[illegible]

[illegible]

女人[illegible]

○拾芥抄曰四月八日延暦

寺文殊ミ?堂の出?…し　又元亨釈書六之の十ノ延暦十七年四月よ
文殊の事まて從人
新指老之
延暦寺戒壇（天永元年三月廿六日炎上の後也）さしに造りて從覚法親王文殊[illegible]
從の[illegible]しは[illegible]あの[illegible]ぬとしとを少
從?僧令

○皐月祭　八日
○大和名所記云毎年四月八日南都興福寺
中門にして[illegible]と[illegible]人舞[illegible]の中陵王の舞と奏する[illegible]小
[illegible]の皐月[illegible]と[illegible]皐月祭と云之

○清水祭　九日
○神社考曰清水寺鎮守本也文
殊号地主権現四月九日祭之○神社啓蒙曰所祭神一
座大己貴命未考記文○[illegible]田村将軍の[illegible]
仁元年[illegible]して清水寺の[illegible]四月[illegible]の[illegible]獅子[illegible]
て社地と[illegible]獅[illegible]文殊の[illegible]菩薩[illegible]
の補[illegible]菩薩[illegible]
習合の一社とし[illegible]田村[illegible]文殊の[illegible]之
○雍州府

志曰地主古旅所在白山通五條北今石地蔵所存也祭
日暫居神輿於経書堂前是表旅所之儀也○当代清水坂
西[illegible]坂[illegible]の[illegible]小坂[illegible]の神[illegible]例[illegible]経書堂[illegible]
神[illegible]神輿[illegible]神[illegible]旅所の[illegible]獅子[illegible]
[illegible]文殊の[illegible]一説[illegible]豊[illegible]の二
神[illegible]

玉葉　[illegible]天の[illegible]
[illegible]人[illegible]清水寺の[illegible]
○[illegible]享保年中[illegible]清水坂の西[illegible]の入口
の[illegible]旅所と[illegible]
[illegible]旅の[illegible]之（大石神）

○神衣祭　十四日
○神宮雑例集嘉応二年解云於
神楽衣勤者掛畏天照坐皇太神御坐天原之時以神部
等遠祖天御梶命与司以八千々姫与織女奉織之間御

垂迹之後于今其勤誠以嚴重無双也○延キ式曰四月
九月神衣祭大神宮和妙衣廿四疋髻綿頭玉手玉足玉
緒伊禮緒等糸各十六條縫糸六十四條長刀子一枚短
刀子錐針鉾鋒各十六枚菁糸玉串二枚韓櫃二合盛衣
一合盛物 筥一合盛雜絹 荒妙衣八十疋刀子針各廿枚韓
櫃一合盛刀子衣并 荒祭和妙衣十三疋 右和妙衣者服部
氏荒妙衣者麻績氏各自潔齋始從祭月一日織造至十
四日供祭其後太神宮司祢宜内人等率服織女八人並
著明衣各執玉串陣列御衣之後入太神宮司宣祝詞訖
共再拜兩段 即請荒祭宮供御衣如太神宮後是日笠
縫内人等供進菓笠太神宮三具○古語拾遺曰麻布
謂之阿良多倍 糸布謂之爾岐多倍○垂仁紀曰倭姫命以
の為ゝ[illegible]○垂仁紀曰倭姫命以[illegible]
乃以再興之今四[illegible]

○面麻呂傳書 古日

林寺者俗号當麻寺用明帝第四王子麻呂古因兄豊聰
王子訓所創也推古帝幸官寺初号万法藏院在内列
山田郷白鳳二年麻呂王子得瑞夢移干當麻々々者役
小角之家地天武帝聞夢事勅刑部親王論干小角麻呂
王子伴刑部親王至役所役感瑞夢欽皇詔又專二王
子之來使捨其地寺伽藍十年春二月寺改名禪林寺
其後天平宝字中僕射藤原横佩有女性豆世染不納
聘礼專志安養七年六月入寺雜髪誓曰我不見弥陀真
身不出寺門其志確乎不拔数日一比丘尼至不知從来後
相叢僊語曰我今汝見浄土覲弥陀須集百駝蓮莖於是
乎新尼奏于朝詔使送蓮莖二日而滿數化尼自折莖取
絲穿新井濯之五色燦然又數日一女來容皃端麗問化
尼曰絲成否對曰成化女得絲於殿之西北角織之樓杼

○元亨釈書 寺志 像 曰和列禪

軌々始于初更終于四更其幅一丈五尺以藁三把浸油二件寿燭化女捧梭化尼々々与新尼浄土衆相厳々備尺新尼大悦又以無節竹寿軸蓋長竹兩節之間耳又可怪焉化女忽然不見化尼作倡礼図曰往昔迦葉説法所仏事新起又有故感君懇志我來此一至是場永離苦新尼向曰善哉善知識従何來耶又向婦人寿雖對曰我豈異人乎西方教主也向女観音大士也言已凌空而西去新尼自是精修益勤宝亀六年三月十四日安坐念仏逝

○蹤僧書縁起云此来迎行接の法ハ恵心僧都の感夢より始りけり僧都ハ和州葛下郡當麻の人也雖深の後ハ天延年中叡山より此法會をはしめらる扱當麻寺護念院ハ當寺の庵として法如比丘尼の草庵の跡也之寺ハ弘法大師一系の所僧都茶室之所を持奉して本堂より来迎の時ハ又菩薩の仮面を彫ミ日ミ四月十四日法如の往生の日と此迎接會を行ひ給ひし横川常行堂より寄進也之

此頃又専ら四く当代ハ四月十四日一頃云恵心僧都のまゐかて行ひけるハ月之より有り今於護念院ハ仮面並菩薩の形装束備り当院の仮相此法會のまゝと常ニ当寺を行ふ有りく此所の土人菩薩の仮面装束を着て来迎行接の行粧をなしたもとで僧を中将之此土人の行粧を見て観勢二菩薩の役と行要として毎年の古者をつとむおのゝ仮面を戴きて葉を吹蓑は動止ま俗名と云ふ丁」留郎男殿仏なりし

○千團子祭　十六日

○三井寺縁起曰護法善神中院鎮座竈尊垂迹施権之現妙用於結界地現天女ノ貞外立安楽産福子善願因存一乗妙法護持故得護法善神之名粤弘仁年中智證大師五歳冬於讃州金倉寺東方将白時忽然端正無比天女現形来告大師曰汝方与明星天子精霊今権降凡身尊與生化功畢己後近増三井法泉之清遠汲三會智水之流時我現訶梨帝母形詣汝與隆仏法所為守護一乘経王因而妙消隠去也大師長後

至園城寺崛及弘大乗経善神出現曰我居寺内擁護仏法大師徴曰和光同塵雖有其理現五障女形誰許居結界寺内母神答曰我昔在仏所有護法誓約住都率内院衛護慈尊教法今此古仙崛弥勒降臨道場也何夫去寺内居他境故大師許諾而安中院云毎年夏四月十六日一山大衆修行法會閑於錦帳已上縁起書云云

○老又異子母神と姉妹と一子の異子又数万の異子と従ふ者と人味を嗜ふ仏在世の時仏所の勅を命じて十子と云ふ異子母并十子拘子と立て悪業を正法の守護神と為り仏又十子等は異食の者より生ずと云へり

○又異子母絶嘆の結界の護神と為り仏又十子等は仏法を守護と為り又仏弟子の因縁よりて四女と守護婦人の孕産を護り給ふ世俗の千異子より十の園子と供して五穀を祈乞求めたまふ故に号して子園子と云へり

○日光菩薩

神也○将軍略記曰家康君者清和天皇廿五代後胤新田源氏廣忠男武陽将軍家元祖後奈良院天文十一年壬寅十二月廿六日誕生於三河松平村童名竹千代慶長八年任征夷大将軍執天下元和二年丙辰四月十七日薨於駿府年七十五葬於下野列日光山勅謚東照大権現　罗山詩集曰四月十七日午時祭礼神輿三基東照宮日光明神摩多罗神台徒以美金毘罗神即是薬師十二神将之隨一而又山王同体也云爾○台徒説曰傳称寂澄入唐時金毘羅神現于艫頭曰我護汝風帆無恙故朝祈祭此神一名摩多罗神即是大己貴神一体也山王元是配此神故台徒莫不信仰之摩多罗好歌舞左右有二童或撃鼓或起舞一曰丁礼多一曰尼子多是脇侍兩童也此神像秘置法華堂俗曰類朝堂也内人罕見○今只東

○一宮記曰大己貴命男事代主

照文と多くの事あり又は二神と合祭あり又四柱郷子
事と渡る彼麿多羅神といふもの又は山と神供庭と呼て銀杏の大樹
侍所山御所五人二荒の別宮を始め海辺に出て東照文遷
座由しくて以来一山堂舎社殿を建立し今と見るもの皆此の壮観
狩羅山子の集まりしものと毒殺せり

○十五日 大石神 日光奉幣之次第

十五日幣使参著旅館社家之内熙之休息之後有神前内見之伐
十六日未明門主之使者僧或侍時至勅使旅館催可有奉
幣之由次勅使出旅館乗輿至鳥居下輿歩進掛下裾次幣
物辛櫃二合退紅帛之大直垂紋大蔵史生一人持切幣筥
衣冠候中門号唐木門之傍次勅使入幄内中門廻帝之内左脇殿之次退紅仕
丁置辛櫃於中門之壇上退去次史生与衛士舁辛櫃昇
神殿之階拜所置之切幣筥居案上拜所之間也正面辛櫃二合
従是前別当大院使奉行著左脇横座外陣拜所之中央敷厚畳殿勅
使座別当著右脇横座次史生衛士下階著庭上四座左右次

奉行別当下階向幄方平伏次勅使出幄進歩于神前上
階著座引裾如常次奉行別当上階著座如元衛士史生平伏次
勅使讃宣命諸社宣命凡微音限当社高声讃之次奉幣終而神事奉行
院辛櫃出幣物取納内殿次勅使下殿退去史生衛士隨
之退下出自居乗輿奉行別当送勅使至旅館次勅使入旅館
解束帯改服著烏帽子直垂被参千門主御所有御饗應
之伐精進七五三之御膳饗應終而退出勅使家従各調旅装集門
前侍勅使退去相隨直向帰京道此夕行二里余至今市駅宿右或御家記
冥之入

○雑賀祭　月日

[illegible]

○吉田祭　中子日

國愛岩郡去王城東可半里所祭之神同干春日大原野吉田、神四座○御堂関白御書曰奈良京時春日社長屈京時大原野平安城之今吉田、社占帝都之咫尺有神祠之鎮護○兼右廿二社註云或曰人皇五十六代清和帝貞観年中鎮座中納言山蔭卿始奉渡之　月註式曰六十六代一條院永延元年十一月廿五日甲申今年始祭礼依誓願歟　公家御沙汰○簾中抄云五月下子日十一月中申日吉田祭○江家次第曰吉田祭四月中申日子十一東書曰吉田祭永延元年始之元者山蔭中納言一家可祭也当日弁以下参入先着行事所座此間所司着饌次幣帛使及内侍参進次上卿以下起坐欲入身居間主水司御手水進次到神殿前畢供神物上卿着畢一棚次氏人五位以下依次第畢之内侍於神殿内弁備次神馬走馬列立神殿前次神主以下申定神拝申祝詞次上卿以下著直舎殿座次神祇官散祭諸司着饌於上卿以下三献後上宣召官内省御飯堅粟給次大膳官人進立上卿前申云御飯多々良加介給畢次侍舞神主孝始次外記覧見参上卿給弁々給史次可給所司

祿

祿次后宮給」祿次退出　是ハ根源云遊部壹の関白の法成寺にて
吉田の社に幸ありし時ハ奥福らして吉日社と並びたるを称す
南世よりの儀式絶たり只形のみ遺れる事なりし
新続古今　万代とよや四方の事と絶ぬ吉田の神まつり　兼熙
玉葉　まつりきも形も不存して...の名残ハ不　在実

○向列八幡祭　中卯日　○神社啓蒙曰法華峰ノ八幡
在淡海國蒲生郡八幡邑所祭神同石清水○社記曰人
皇六十六代一條院ノ御宇歟向法華峰ニ円御宇長徳三
年行ニ放生會○此月の祭ハ土人の屋形よりや山拝或ハ風流の踊
又ハ相撲ニ詣ましくして業とふして豊年祭とるや

○向日明神祭　中辰日　○神社啓蒙曰向(ムカヒノ)日神社在ニ
山城國乙訓郡西岡邊所祭神一座向日神○神名帳頭
註曰素盞烏孫大歳子也母須智比女○西岩倉令ニ藤の縁
起曰開山隆豊禪師ハ人皇四十三代元正天皇の御宇摂州河辺郡

の人ハ(タツノミコ)渡岩倉宮惠の男子壯栄の時高麗ニ入阿杉山ニ寓居ぬ又ゆく古庵ニ住せ
一時異変ありて此山ニ来る後坂あり山と河杉山ニ宿り時ニ養老二年より山ニ登
て翁を擁して翁ニあり師向云何人を翁答云吾是(ハ)向(カ)日(エ)可愛の山陵より移て
此山ニ住まりぬへし文師を得て祈りし所ニ翁翁と語つ傍なる楠ニ立をおと授ニ
痕より今光を放つ翁云是異木也莫くれと一切して手自像を造る唐ーし
師諾して儀説ニなん如翁云此山を拾く師ニ授く永久擁護をへし又翁を語て
此翁の足海ゑらと庶とせん翁ニ今の向日乃山より西ある遊ニ示ゆ行をとも是向日明神也

○是翁の後より云く当社祭礼のお岩倉山之重瀧ハ社人行く垢離をとりし又祭
日ハ神主と此瀧ニ行之是明神出現の瓦なりし○老る云太縁起ニ不可愛の山
陵ハ瓊々杵尊と葬をる也御ハ此神社ハ此尊を祭りとるや或曰向日社ハ神武
天皇をとりるといふをまうりや相応なりし　可愛の二字ヲエと一字ニ読ハ大石神
　　　　　　　　　　　　　　　　なつりもん　と走りハ行き卯と向ひの神のいりそんなんらん　為幸　累し

○久(コ)我(ガ)祭　中巳但ニツノ時　上巳日　中院通勝日記

四日丙戌梭山城國正六位上興(コ)我(カ)万(ヨロツ)代(ヨ)継(ツギノ)神ニ従五位下ッ

○三代実録曰貞観八年八月十

○当代神号と妻妻の神と子ども人長海神と社祀祥と古雅書と此
妻と婚ふ人世系と此人世林なりも也源と

○御生祭 中午日一名御蔭祭

○神名帳曰賀茂御祖神社二座○同頭注云一社大己貴子大山咋神一社玉依日女也○日本後紀曰弘仁十年三月甲午朝山城國愛宕郡賀茂御祖並別雷二神之祭宜准中祀○諸神紀曰天武天皇六年白鳳五年二月丙子令山城國宮加茂神宮○野府記云寛仁二年十一月廿五日癸未昨日下社司久清進解文可尋日記皇御神初天降給小野郷大原御影山○東留記云嘉吉三年四月廿一日丙午鴨御蔭山祭也如例○御蔭山の社は鴨の御社なり也鴨の神なり
まあ今日下鴨の神なり神なるまく
とをく御列し給人後次の間系樂と奏を神友誠なるまく

必は者と行りなるとなりて神秘の系之御生と神の生れ給ふ之○なる者
金時云あれと御生と祭と解し給ふ○は系なりなる所なるもなり○は系なりなる所
伝る南北軍家系云ん家の級なし給ふる神魂まれ魂なる敬なる
云云御代之縁七月甲戌日月吉午日御祭十四日丙申日祭系再舊よりて行りなる也
ちなる二面伝も給ふなるなり○は系伝の妙伝を新年殿之也石補

○蒼宮祭 中午日

祝詞云帳之所の山乃ちなる所乃者なるまくまそとる中京作光

江州野州郡所祭之神三座所謂大宮二宮三宮是○神
名帳頭注云玉津正一位小津神社宇賀魂也按社家注
進大宮本縁円上二宮素盞烏三宮大市姫也 按祭奠
必用午日又称稲荷円躰則玉津之二字蓋有據乎○光
と者系と姫を形例一形なるの方系と系なるり

○賀茂遷系 中申日

○續日本紀曰元明天皇和

釣四年四月乙未詔賀茂神祭日自今以後國司毎年親臨検察焉○神中釣云志賀嶋宮御宇天皇之御世天下奉國風吹雨降尒時勅卜部伊吉若日子令卜乃賀茂神崇也撰四月吉日馬繋鈴人蒙猪鬼而以為祭祀因之五穀成就天下豊平祭日来焉始於此○[illegible]根源日欲明天皇の[illegible]

○加茂祭警固 日日或未日

固祭前未日或申日行之雖祭停止年猶有警固依有國祭也上卿着陣令藏人奏可行加茂祭警固之由藏人仰

○江家次第曰加茂祭警

上卿云聞食上卿令外記若近衛官人召内堅々々入自敷政門跪小庭上卿仰云候布司々召世内堅出召六衛府將佐入自日華門列立軒廊南上卿仰云加茂祭欲為故尒跡也仕尒固女衛諸衛同音称唯退出次諸衛立警固幄五位已上衛府帯弓箭壺胡簶 大將検非遠使別當平胡簶 検非遠使佐候殿上之者壺胡簶○[illegible]

○関白加茂詣 中申日

頃有定並三日神馬走馬令潔齊前一日御装束当日早旦御湯殿次御覧神宝次出御次家司以下畢神宝並於御前次給舞人陪從等装束次入御刻限公卿以下参入主人束帯出着御座次卿以下着座訖次舞人十人次神宝以下東渡其次菅先前拂二人次御幣二捧次神宝二荷次御祓物御琴持次出納二人次小使二人神馬二

疋次走馬十匹舞人乘之次乘尻二人次茅渡畢次主人馬十
疋次垂尻二人次主人於東門乘御車公卿以下各乘車
其行列先御隨身十四人次召使二人次官掌二人次前
駈六位以上四位以下次殿上六位以上藏人頭以下次
外記史次少納言弁次御車唐車御車副也次陪從次検非違使
二人次公卿以下相從如常到下御社一鳥居外放御車
牛次公卿以下下車次主人上車簾下到禊殿著幄次御
手水次居御祓物次畢一長櫃立神宝於幄東次五位二
人六位二人執白妙御幣列立於其南次陰陽師著座次
舞人等引立御馬次御禊畢北面陪從発声参御社頭御幣神宝
走馬在前次公卿以下相從陪從発物音相從次主人著
御楼西廂座解劔次著御於舞殿次立神宝案於舞殿北
諸大夫以下運置神宝畢上蔀家司取金銀御幣各一捧
奉主人々々取之両段再拝訖召社司給之社司取之奉

神殿神宝等日次社司申返祝訖主人還著御於楼西廂
座諸卿同著座北面舞人引立走馬於舞殿東西次廻御
馬三度畢神馬引入於御前方次東遊次社司進榊桂此
間社司供御酒三行此間賜神人祿次著膳訖廻御車於
身居外屋次舞人上御馬次茅走之訖次参御上社一如
下社儀次還御主人御於對廣廂賜御前祿○その根源は四
国の多度郡の多度神社なり日次と撰てはものる天福二年九月廿六日
多度神社の○五色絹国の人九多度神社
あの日ものこと主人は車より地下殿上のお立するものの御幣神宝を櫃
やうのものとうけもつて也琴の箱等五つ
社役をもつて神物あり榊と祓宜物とを
○はるも世代絶えぬ御代

○日吉祭 中申日

○神社啓蒙曰日吉社在淡海

國滋賀郡坂本邑所祭之神七座授屬社十四座大宮大
己貴命鎮座紀三月二宮國常立尊神緣之日吉鎮座紀云
此即天地二伐主神天地始其中間出現之故名二宮二
字此天字畧也垂跡始自神代已來波毋山降現也聖真
子正哉吾勝尊鎮坐紀曰聖者神也言於兩神真心中出
生故名聖人王四十代天武帝御宇白鳳年中御影向八
王子國狹槌尊鎮坐紀云八十万神大祖元氣神也尤有
口傳人王十代崇神天皇即位元年鎮座客人伊弉冊尊
鎮座紀云人皇五十五代文德帝天安二年六月十八日
迁宮十禪師瓊々杵尊鎮座紀三月部注之三宮惶根尊一說云天照太神三
女鎮座紀云三女影向故名三宮日大紀云惶根尊是也
延暦三年陽春中頃臨幸記上本社所屬十四座加上七社亦七一社
下八王子天御中主尊鎮坐紀曰祭礼七社外當社有神
馬也東有石名石船明神初降之地王子宮建御名方命

鎮座紀曰自信列諏訪郡鎮座早尾素戔烏尊一說云猿田彦云鎮
座紀云馬場頂上鎮座也諸人加護深重神之故坂口祭
之大行事高皇產靈尊鎮座紀云昔日神入磐戸閉居玉之
時以此神之謀而集八百万神奏神樂日神再御怒解聖
女下照姫鎮坐紀云延喜年中祭之新行事瀛津姫鎮坐
紀云天照大神三女神之一也牛尊或曰牛御子鎮座紀
云八王子右祭之此殿有灵石左口傳小禪師彦火々
出見尊鎮座紀云地神未尊也惡王子深秘鎮座紀云童
子形出現岩滝蹈韡姫命鎮座紀云竹生嶋神月躰也
劒宮素戔烏尊鎮座紀云童形出現也氏比仲哀天皇
鎮座紀云植武帝御宇勸請之大竈殿澳津彦命鎮坐紀
云大歲神子也大歲者杵築大神御孫也諸家竈神是也
竈殿澳津姫注曰或問祢山王奈何曰此名非上古言也
五十二代嵯峨帝弘仁十年始祢且按鎮坐紀小比叡神

始顕此山而与一切諸民守護之王故該祢七座号山王已上啓蒙

○神社考曰按日吉神号者傳教於小比睿峰見三光日輪現釈迦薬師弥陀像教問其名神告曰竪三點加横一點横三點添竪一點言已昇空而去教於文字見之号山王二字高大不動者山也経緯三才者王也由是遂崇号曰山王○考て廿一社の流を家伝の如不審蒙の義遠せり

当代に於て廿一社を立て仏菩薩を垂迹とすべきなり

○日吉鎮座記祭儀式曰卯月祭礼者琴御館以大賢木奏神幸之祝詞於唐崎如先盟恒世商奉栗御料也出神輿而祭者桓武帝延暦十年又御舟祭始延文年中洪水已後例也○文石神延文元年日吉祭無之て舟

神幸の祝詞に行祝宿禰祭作りしかい紀内の姫と云出くりたし作りし

案書　船をしまれのゆさま幸後の黄と祢くなりし出くん　秋谷

ちくく神幸の行る神代の黄とそんし　行祝宿禰

船祭盤觴

日吉社神道秘密記曰近代延文年中大洪水唐崎之浦水蔵山まくさと切くち庫宮文の社蔵より道の山の譯り込陸地無之其時御船祢（道の山柳社の山なく別七社の輩と出る也之仮名抜式法師船其以後如此近或比蔵山のちんとる）甲書と号し唐山戸法の樹数一名者の内より伊年者一回御船祭也上古無之新義

○二十二社注式曰人皇七十一代後三条院延久四年四月廿三日記云今日比睿祭也自今年初被立官幣或曰六十四代四融院貞元二年四月廿六日始被遣上卿弁外記史諸司等○当代の多礼右実と先ちしいとも署を礼作の先二月六日大神代とく

根原四代社を杉尾の社と同神なりと

洪水唐崎之浦水蔵山まくさと切くち庫宮文の社蔵より道の山の譯り込陸地無之其時御船祢（道の山柳社の山なく別七社の輩と出る也之仮名抜式法師船其以後如此近或比蔵山のちんとる）甲書と号し唐山戸法の樹数一名者の内より伊年者一回御船祭也上古無之新義

ちくく神幸の行る神代の黄とそんし　行祝宿禰

神輿血塗と云感應伝りて云伝て云合

と云人と名輿丁に落小八流方多氏名と動む神女名多の人とおまい

細と行ぶら書行年と花推で須賀ま七年柳とる平ま汐は宮ま松二殿つ

祢て七社の輿と念ま重後ま方の一賜の図ま式平ま稲ま方出代

形と調へなりて猿の形の出来しけるなり七社へ神供と備へ奉る料也
猿ハ畢て悉湖水へ神供と流しけるに神楽ハ湖上と同じく今津貝津へ至る
ところの也ありて船にて上りけるにハ湖辺の村々にて宿道りまて神楽ある
故なりハ松田と作りく西北ゟ絵へ

○大石神 昔年より比叡山へ血と見給ひしハ神楽あり給ひしとて法師並人ありて及備を奉りし叡山根本中堂在京都諸国職ニおいて所家中比七社の見物しけると法師とも切殺しけれも法師並人々諸司ハ少し出されハ争れも神の御事にあら浄土という事なき人を害しけれと尋給ふに法師ともみな血と見給ひハ神楽あり給ひしとて令細くハ左の中之さりけるハ他の人数と害せん事御へ事けるに方ともハ山王の御影と帯して下子法師等を頼みも神の御意と此事に法師並人の中を圍みて一人を出し祭礼の時ゟ備なく殺害されしと伝ける法師並人々も此旨ニ違惑し給ひ化言と申上にてさりけるハ見物人ニ対し及備ニ及ひ申以来伝へしとて法師並人も一列の出家とかくしハ出儀ニ及ひ申しく是より以来人を害せるなしと古老の人ハ語られし也

△未御供 祭の翌日

○日吉七社の中二宮十禅師の本社へ祭の翌日赤山の傍の猿の生き御供をさ奉る是ハ京室町山王町の社并祇園旅所の社ゟ備ふるもいへり山門在と妙法院文京ゟ供奉神輿を加賀の終て猿ハ道に捨て猿ハ供奉と神輿并文司の備ふると是と其の祝詞と申を後白の神楽乃外ニ二社以上四社の神楽ハ本社の相殿ニ入佛有ハ此事文明ハ比祭の古くより御く地外宮の傍りとて雑式出田常ニ猿ハ迎之付御供ト戌刻すり先と未の御供と申也

○葵祭 中酉日

○神社啓蒙曰賀茂社在山城国愛宕郡去王都北半里許山麓有宮曰加茂別雷皇太神宮○二十二社註式云日向国仁天降坐須神於加茂建角身命止申須神倭磐余彦天皇乃御前仁立坐天大和乃國葛木仁宿すり彼与利漸山背國岡田乃加茂仁遷幸山代川仁下坐天葛川止賀茂川止合處仁立坐給比賀茂川乎見巡之天宜久狭久少也止云止毛石川乃清流

也止天石川瀬見小川止号久川上仁宮所於定給天北
山乃麓仁住給利其時此處乎賀茂止云也止○年中行
事秘抄云于時御祖神等憑慕哀思夜夢天神御子ト各
將逢吾造天羽衣天羽裳炬火祭鉾待之又餝走馬取奥
山賢木立阿礼悉種々絲色又造葵楓蔓巖餝待之坐山
木天神御子称別雷神吾將來也御祖神即隨夢教令彼
神祭用走馬并葵楓夢此之縁因也○注進略記云往古
此神降臨坐所有岩根是謂降臨石其神山御生云云○河
海抄云賀茂祭前日於垂迹石上有神事号御形今在本宮北一
町并御旅所道西有圓是日御生所壇祭前日假殿立此地○
雷神と生給ふ事○秘抄曰実御生の中の日也西の日本生と被云云
○社家者　年毎の御生の日の事なり初度の事なり　後日
○江家次第曰賀茂祭使禁中公卿着西庇座殿上人着
南庇座諸大夫着車寄廊座舞人十二人着座陪從着唐
庇座居公卿着物一献二献居粉熟先舞人料悉次公卿
料居繪折敷有別汁物次殿上人次陪從下着三献居飯居汁物着
下陪從參歌笛賜裝束舞人陪從改裝束飯座四献給柿
頭花公卿以下取之近代殿上人取之加茂祭無此事往年參內後到內
藏寮着座懸葵故也次敷穏座四座於唐廂公卿移着居
穏座着物若當府大將彦大臣進着座者召舞人賜坏陪
從參物音參進舞人進立舞畢退出○又曰今日二藍下
重丸鞆帯鼻切履又賜青色紙帖次將參入於弓場殿餐
物壱即召御前候長橋妻先敷四座六位居衝重五位兼
人勧盃舞人於東座奉仕舞求子畢退出次使給祿進川竹
臺畏拜舞退出次覧餝馬入自滝口戸轅馬副隨身千振
等也内藏寮使着内侍所奏事由給宣命退出○同祭路
頭次才歩兵左右各四十人騎兵左右各六十人郡司八
人一人介斉傳内藏御幣中宮月東宮月院月宮主東宮走馬

中宮、円各三足　馬寮円左右各六匹　春宮使中宮使　馬寮使　近衛
使　内蔵寮使　蔵人　内蔵人　中宮余婦　内余婦　左
右、火長各十人　門部兵衛　近衛左右各二人　長宮　御輿（齋院）　駕与丁　前後各
十人　輿長左右各五人　女嬬十人　執物十人　腰輿供膳、辛櫃三荷雑、
器物二荷　膳部六人　陰陽寮漏剋騎女十人　童女四人　院
司二人　辛櫃十荷　蔵人所陪従六人　御車　内侍車女別
當車　宣旨車女房車六輌　童女在此　馬寮車　○公事根源曰未
の日先上御陣　次第　六府　左右　の役　国の司　役所の中ねつとも
昔蓮の台物　しちりん　人　英桂の撃　杉尾の猪　公卿　き
天上　鳴る　天皇の　しちりん　鳴る　神の　建角身命の　小川の
柏　小川上　丹塗れ矢　一柏　小柳　男子　男子　父　誰
何　盧　父　盧

あけて家の屋の上を踏やりて家に天狗の出るなりと天上ときこえたるなり
別当の命令　今の丹塗の矢　杉尾　神の
天杞中記小祀　一月の神　三日の夕　中祀
小祀　中杉尾　平野　社の
○　公方　舞　昔の
城　神　神

△當代賀茂祭諸式○使進發次第　前伐　早旦内記付宣命
於内侍以長階扇寄内侍所代　次奏聞畢内侍召内蔵寮使賜宣命
次出御大床子四座　南白候便所出御昼御座者候御前　次使相具
舞人陪従等立弓場代　次使令陪従発歌笛　次職事聞物
音出逢　次使奏事由　次職事還出告石由　於使次使入長
階断間昇假階着四座　次蔵人二人居衝重物　於使前次
職事勧盃蔵人取瓶子此間陪従進東庭発歌笛舞人相
共進出庭中舞求子畢退入　次蔵人頭於思間簾下取勅

祿賜使次使懸祿降庭中拜舞次使馬御覽隨身引廻之
三匝次使引率舞人陪從等渡南門前參向社頭諸使館人等出
（自唐門）先向下社○路次行列之次第　先武家雜色前行
素袍　看督長四人　火長素袍調度掛　白丁
檢非違使馬
素袍　看督長四人　火長素袍調度掛　白丁
檢非違使馬
二人　素袍　看督長四人　火長素袍調度掛
檢非違使馬
二人　素袍　看督長四人　火長素袍調度掛
白丁二人　素袍　手振　白丁　白丁二人
山城使馬
白丁二人　素袍　手振　白丁　白丁二人

素袍　衛士　御幣櫃白丁四人　同　同　○內藏寮使史生
素袍　衛士　白丁之
白丁　白丁二人　素袍　䌶　素袍　同
史生
白丁　白丁二人　素袍　走馬　䌶　素袍
○
䌶　素袍　白丁　素袍　白丁
○
䌶　素袍　馬寮使大允左馬頭右馬頭年　素袍　白丁
○
近衛使車　和琴白丁持之　白丁　素袍　白丁
○
近衛舞人馬舞人六人　白丁　素袍　白丁

列行馬上
從者同前

素袍二人　布衣二人　𩊚御身隨
近衛使左右

素袍二人　布衣二人　𩊚御身隨

馬副二人　小隨身二人　手振　白丁二人
（手振者数不定五人十人乃至二三人二列依其人所好白丁二人）

近中少將立之馬上

馬副二人　小隨身二人　手振十人
𩊚御身隨　小舍人童　傳宣人　雜色四人

牽馬　居飼

𩊚御身隨　小舍人童　傳宣人　雜色四人

取物舍人二人　素袍　白丁

陪從六人馬先和琴次歌篳篥笛琴持二人
取物舍人二人　素袍　白丁

素袍　馬副　手振　白丁二人

内藏寮使助馬上　次武家雜色列立行

素袍　馬副　手振　白丁二人

下社々頭伐　勅使參向於鳥居外下輿椙非違使留
鳥居外次勅使著祓座（先有手水事）（社家設之）有解除事此間内藏
寮使進案下寄立二棒御幣（史生授之）次勅使著舞殿座此間
祢宜祝著中門右右次内藏使參進舞殿授宣命於使（異本此十三字無之勅使著舞殿座之次細字云）
（先舞於使所内藏寮使渡宣命於使云）次勅使二拜讀
宣命讀畢二拜次祢宜參進勅使授宣命於祢宜々々取
之退出次祢宜祝取御幣參進神前次祢宜傳申（祢宜神宣）次
祝申返祝（儲敷菓薦設之案於中門南）次祝持參榊（挿白木奉之枝）勅使次
勅使起座次奉御馬廻舞殿三匝（馬寮前行）次勅使著胡床次
陪從列立中門東邊次舞人進舞殿前庭舞駿河舞求子
次走馬此間祢宜於使所返授宣命於内藏使次勅使著

退出参向上社賀茂町家黙飯酒休息而参向旅宿

○上御社神事式

先神主以下参集侍所刻限神主祢宜祝等二十一人各行列参社（轉供氏人世人同参）次勅使参向（於一身居外下輿）諸司各整行（陪従自一身居邊発物音以楽屋為其所）暫猶豫次神主以下著土屋座祝相介出二身居著廬母屋座次従贄殿進神供於左右御料屋祝捧御葵桂前行神供経土屋陽時社司各敬屈於玉橋邊有神供之祓（陰陽大夫役之）次社司各参御前（社司等起座之後撤土屋四座）次祢宜祝相介着廊座於玉橋邊有祓（陰陽大夫役之）先是忌子参社頭候御殿東階下次渡御鑰於正祝（役之）次正祝参進大床（於階上二拝）次開御戸（社司以下各平伏）次進御前次神主正祝相並（於階上二拝）入内陣次社司各候御前拝畢列座左右次捧御簾（神供之前敷神供唐櫃蓋別当所司役之）次備進神供畢下御簾（祝役）次進神供（干時楽人奏音楽未備進）次社司各退下（下与先同）次神主祝出自内陣五官各着祝詞屋行次片岡社祝言次八社祠官各参某社開御戸備進神供次外陣朝御饌（権祢宜役之）（権祝役送之）干時楽人奏音楽次五官申祝詞（申片岡社祝言後待預大夫告申本宮祝言）次撤外陣朝御饌（権祢宜祝役之）次正祝参進御前（別当所司役之）次社司各起座（別当所司）次納御戸不加御鎖次納神供唐櫃蓋次社司巡拝後各止楼門内次吏生以所捧持之御幣奇立社等（社家兼解除伐已上設案）次勅使昇橋殿北庭案次内蔵寮使進橋殿（社家兼設案）次勅使昇橋殿南階着座（先是勅使手水畢有）賛宜祢次二拝次神主昇橋殿北階（東頭）請宜祢次持参宜祢於御前此間内蔵寮官人捧御幣参進社内次於中門内唐戸前取御幣次於祝詞屋申祝言（先二拝祝言又二拝拍手）畢次帰出申返祝詞畢於片岡社四月之中石上申之畢拍手次勅使拍手次神主昇橋殿北階（東頭）進御葵於勅使返祝

言以前兼抹御帳之御葵挿白木杖渡祢宜祢宜持出置
御幣案上次勅使退降橋殿南階假著上屋西軒下次馬
寮官人牽神馬廻橋殿三匝次陪從発歌笛舞人進出舞
東遊次歌舞人退入次勅使退下次内蔵使已下参社之
輩各退散次撤橋殿座次神主祝於橋殿有祝詞之儀次
支馬（支馬参神舘之時所司太夫申祝詞）次神主已下社司各参御前着廊
座如恰儀次正祝参進御前同御戸（社司以下各平伏）次神主祝
入内陣次社司各参進御前次寮御簾祝役伏次撤神供干
時楽人奏音楽次社司退出（神主者殘留）次神主自内
陣退出次祝閉御戸加御鎖（社司等各平伏）次神主已下各退下
著橋殿座（昇南階）次走馬寮尻来（告假参之由）於社司座次
神主已下社司各起座（降橋殿南階）次岩本沢田奈良社
巡拜次著廳座有饗儀事終各退散○右当代多度多の式
二條殿中影記録ノ写ニ中録ノ写ニ

中ニ〜下裏ニ有代々勅使参向之儀如此口授間之ノ外
勅門部ニ〜第ニ〜社司ノ参向ノ有ル仍当社の入口下馬の所ノ又歩儀ノ
前ニ〜第裏ニ〜参向ノ有シ事ノ多ク

年大乱後断絶元禄七年甲戌四月十八日御再興　勅
使（左右近衛中将三十五石）賀茂儒奏（大中納言十五石）奉行（五位蔵事十石）
宣命（大内記三十石）　祐料（内蔵頭三石）　奉幣料（内蔵寮四十石左奈出納右奈徳
図）　少内記一石五斗　内蔵寮使七石　山城使七石
撿非違使二人十四石　左右馬寮各一人三石　御随
身四人（十二石）　舞人六人四十八石　陪從六人四十
二石　出納一石　大蔵省五斗　内蔵寮五斗　小舎
人五斗　掃部寮五斗　看督長八人九石　火長四人
二石八斗　内蔵寮史生二人二石　衛士二人二石　使
部二人二石　童子一人一石五斗　校持一人（一斗）石六
雨皮持一人八斗　掛杖持一人八斗　掛笠持一人八斗

榻持二人一石六斗　調進方　御馬左右馬寮各一

囚座三枚帰部頭九斗　殿上畳七枚三石　小板敷畳大蔵五斗省

宣命料紙一口書寮一石　饗料内蔵寮三石　勅盃造酒司五斗　瓶子

五日人斗　右賀茂祭下行高三百石殘米十一石四斗

○中山祭日日

帝京三條猪熊之邊所祭之神豊石脯奇石窓命遠古諸拾是

並太玉命之子也

○舊事本紀曰天石戸別亦名櫛石窓神亦曰

神石窓神此者御門之神也啓蒙上

○賀登大師年譜曰天安

二年戊寅六月八日來商人李延孝舶離唐岸十八日西

時素髪老翁現于海上曰吾是新罗圓神也須護和尚教

法到慈尊出世言已不見師入洛之時其神又現勅止鴻

臚館今岩神是也後迁三井小野

○古事談云中山社岩神者冷

泉院中嶋令祝火神給其後事外放光後冷泉院御時

欲幸宣云門前車馬多時出入不輙給此所一向欲住云云

依之令去移他所給

○多武峯縁起云水茎之年六月十六日神ノ社ヲ

建立し同年十二月八日の夜之位の神位と授ける是に於て石神の後冷の形成天喜元年四月ちなみ宮殿あり○兼邦百首歌に云中古の神代とかや三井寺乃小の後よりは其新殿の神を之を奉安申

○愛宕社 中支日

波図業田郡水雄北所祭之神二座伊弉並尊一座火産霊尊一座○葦原卜定記曰戊亥仁當天王都守護神明坐寸即天神第七陰神也火矣於永久退弁与也止天若宮仁和火産霊於置王奈利偏仁帝都静謐乃基也○神祇拾遺曰當社久代者平安城北鷹峯東隣也光仁天皇御宇天應元年歌慶俊奉遷今之霊地矣仍神人等ト居於北山麓 秀歌猶注 六月部○按ずるに例祭の神輿を基清清水寺に行て祭日北遷と

○如法経會 大日如来 九月十七日

日用基竹巖律師諱聖皋嗣法於拙奏珍律師文和上皇戒師也柳此経會者後円融院勅願也傳曰應保元年奉勅用石丹州為筆墨写妙法蓮華経且修法華懺法以所書経納于塔所謂如法経者也帝賜荘田若干為写経料勅書略曰如法経者功徳甚深不可思議故今聖皋上人依法修行朕後當於諱辰行之以資朕冥福乃施播州伊川庄以充其費云○其流の古く後光厳帝融院二帝の陵墓の〜ひ寺歌の彫像は後世の作なり

○東山泉涌寺雲竜院古記

曰開基竹巖律師諱聖皋嗣法於拙奏珍律師文和上皇戒師也柳此経會者後円融院勅願也傳曰應保元年奉勅用石丹州為筆墨写妙法蓮華経且修法華懺法以所書経納于塔所謂如法経者也帝賜荘田若干為写経料勅書略曰如法経者功徳甚深不可思議故今聖皋上人依法修行朕後當於諱辰行之以資朕冥福乃施播州伊川庄以充其費云○其流の古く後光厳帝融院二帝の陵墓の〜ひ寺歌の彫像は後世の作なり

○高野山草創後 十日二月

仁七年遊紀州相勝処上高野山創金剛峯寺於紀伊国伊都郡高野峯被請賞左入定所 又曰釈覩賢西座主撰与聖室上足表見性灵集之中 西寺 延キ二十一年上帝西夢弘法大師奏曰我衣弊朽願忝宸恵覚後勅択法之徒尤者送紫衣一襲於野山賢中選入山啓定扉如隔雲霧不看伐容賢作礼曰少年修道梵行並授況奉遺法累歳月辛黙祈須臾伐漸見猶如霧歛月彰賢頂礼瞻仰鬚髪甚長使剃落而換衣諸愛不能見恐後世致疑謗賢胥綏重石同封 ○山家僧の説りを伝ふ

只冥月ニ入ル為ニ山全堂の菊ニ之学寮の僧 俗法ヲ之行ク

手ヤ付為ニ之国ニ石の人民始の如と拝ル して全堂の行ヲ法ヲ伝ヲ

於ヲ寮供の名仰ヲ蕾ヲ ハ ニ ヲ ヲ

○駒牽 十八日

日 小月廿七日 御覧駒式 御者御厩馬監之 牧之意 右当日早朝調列櫪飼御馬八十匹國飼三十一匹車駕幸武徳殿登時官人率御馬自便門出至於馬出埒下寮頭以御馬名奏進於御監々々執奏而後左右寮頭左右介立於御馬之前允一人執簿進立殿前乃従埒西外御馬稍進比至御前奏馬名詞云某司御馬合后于寮飼若干其國御馬駒若干有臣下貢者称姓名貢御馬度尽退出次右馬寮御馬如前左右寮助亦左右介立度畢即左兵衛陣 隙前西寮立繋不調馬之 柱各一株以美鞍騎之使 五月四日以前各抽收 鞍 不調馬騎以騎士但允以下率近衛兵衛官人舎人等還至於寮家悉鞍馬令騎其不堪騎者騎以騎士但不選馬次才入埒尽度々畢蚤時寮官率馬醫并近衛兵衛官人等就於馬留埒西鳥點定馬走品寮属一人執馬簿立馬出埒西過毎馬出奏内竪傳奏

○延キ左馬寮式 右馬之 曰四月廿八日

馬駅畢(テ)更還(ヘ)寮簡(ノ)騎射料(ノ)馬(ヲ)

二十八日乗輿(スヘシ)幸武徳殿騎射官人兵衛惣六人(近衛府ノ)

○今年閏五月ノ後ノ八月ノ小ノ月ノ名ノ所ノ見モ如ク天

皇武徳殿ニ幸シ給フ卿ノ仆所ノ侍ノ盛ノ者ノ馬ヲ

奏シ給フ内ノ侍ノ盛ノ者ノ馬ヲ奏シ給フ内ノ侍ノ盛ノ者ノ馬ヲ奏シ給フ

府ノ騎射ノ次ニ奏シ給フ右ノ将ノ盛ノ者ノ馬ヲ奏シ給フ

左ノ将ノ盛ノ者ノ馬ヲ奏シ給フ次ニ六人

的ノ幸ノ射ノ騎射ノ事ノ次ニ左ノ将ノ盛ノ者ノ馬ヲ奏シ給フ

始メテ延長五年ノ八月ノ事ノ如クニ

○同左右兵衛式曰凡四月

騎射官人兵衛惣六人近衛府ノ

○右相国ノ永延二年ノ二条院ノ

月十二日ノ後ノ月ノ内ノ右ノ内ノ柳ノ右ノ内ノ

小倉保二年ノ月ノ世ノ内ノ柳ノ右ノ内ノ

五月ノ内ノ新院ノ内ノ北長奏ノ府ノ生ノ

給フ内ノ内ノ博士ノ内ノ蔵ノ所ノ内ノ

ノ先生ノ殿ノ内ノ北ノ所ノ内ノ

内ノ北ノ所ノ内ノ冠ノ内ノ

ノ内ノ内ノ内ノ内ノ

○新日吉ノ祭三十日

○右相国ノ永延二年ノ二条院ノ

小倉保二年ノ月ノ世ノ内ノ柳ノ右ノ内ノ

五月ノ内ノ新院ノ内ノ北長奏ノ府ノ生ノ

○三枝祭

○神祇令曰三枝祭○弋解曰

謂率川社祭也 是社二月之部注 ○或説云今案率川三枝別社也率川社南有三枝御子社諸神記云件社右大臣是公建立也因茲南家苗裔行此祭 ○さゐ枝の祭は此三枝なれば率川祭とかいふ神祇令のせうに三枝の花をもて酒樽をかざりの故に三枝の祭といひ、やや古き書には二月の率川祭としるしたる故に神祇令の孟夏の祭の数に載られたるは今しきと四月の下の申の日の率川祭こともあれと右大臣是公の建立し、申には備へたりと思ふべきを、今と申し書に清海公の元ちかく見えて其の中に奏状をとる所是公の古へは清海公の曽孫なりと既に率川社と備ふるは是公の建立したりといふ事八つきりにや、書きしるしたるこそ神社也是公の再興なりと建立したりといふと思ひしは三枝と申して実にいさゝかと疑し ○賦昭歌 乃おもふに三枝はかくたしなみきえ波系未尾にて見るにも、年中行事 予の花三枝のもとにむけてや神のおまへに法用するを、入道大納言 判云綺る櫻のつくし給はく見あらく備へてし新中納言申傳しけれは祭の役掃部と、さきの事やしと此後末々しまはゆる式にも此日の事に神代のいませやはじめけんさえてとは御ことなり

ましまかれる事かりしかと仰け従二位中納言申されしかは、譲まて与おかれし判定、やまきたへおもとおきて酒樽とかまりと其うへ見に仰かりとたひ見れきまへきさは、おもひでとて掲しと定めき ○是を此頃は四月の祭れと様さ三枝用るなりし

○古塔會 十月の或日 頂宮 おもれも大會まく仰らし申せ当世流布する会料を成して傳へ四月の塔供を、所乃やすく法の傳る之様見ぬしに ○業は按列天王寺の法會之往昔は當寺の僧に叢祠あるく古塔の宮と称も所祭午頭天王之同仏は聖徳太子 ○按陽群談四古塔塚四天王寺東大門の北にあり塚の基 太子自造 聖徳太子 薬師 如意 聖徳太子自造 聖徳太子辞世の歌のうたに 崇峻 と神並ならと此社ハ当所の氏神なりし、往昔は山鉾と渡し美々敷ものなり

○太秦の祭 上申日 ○山城国葛野郡太秦広隆寺に鎮座の社 おもて六十八所神 神名略し、毎年四月初申の日御手入て神輿と一與まつり太奏七郷と神輿ちから広隆寺中の社に遷座する儀あり法楽の後これを是とうまき おもとは古き維年の九月十二日ある奏祭と申すり是をかりしたるの大会役會皆々午祭としるとおもしあやまれる也其後より北會とて奏祭なるが此頃へりて是午祭と称せ

[illegible]

○大津郡　上文同

○紀列津の驛之井寺の後山ノ十石岩より之
樹木より後の社多ク示ス山王立一社の四早尾の多之故ハ[illegible]と俗ハ[illegible]
多ク[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
神多宗和の郷ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
樹多ク[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
大津郡と通称ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
多古雄ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

○祈祭

○神代紀曰天先成而地後定然後神聖生其中○説文曰天神引出萬物以示申声
曰祭礼也又右手也多肉也从示右手持肉○尚書大傳
曰祭之言察也察者至也言人事至於神也○和訓栞解云
[illegible]人代之間[illegible]

[illegible]

○連[illegible]
或田祈[illegible]
[illegible]
[illegible]

○或抄云[illegible]

[illegible]

△榊取

部遠祖太玉命掘天香山之五百箇真坂樹而上枝懸八
坂瓊之五箇箇御統中枝懸八咫鏡下枝懸青和幣白和
幣相與致其祈禱焉○又曰亦以天香山之真坂樹与鬘
○宝基本紀云榊一名真坂木受持自然之正気冬夏常
青故以安木中賢木号榊○順和名抄曰榊氏漢語鈔竜
眼木佐加木今按竜眼者其子名也見本草日本紀私記云
坂樹刺立与祭神之木今按本朝式用賢木二字漢語抄

榊字並末詳○和訓義解云さかきの本下略○今
按榊字尋書神と多くよ榊とかゝる神代の巻に多くして連誹多くよりて
也又上古云神多のうちさかり夏よりの月ゆきすくし又神ふの採物とも榊作多れも
匂よりて神ふたりと結ぶく多孝するつし冷味をしるし榊とかゝ雜之
續拾遺　榊とうゑもとれ続多くしろ神の面るの部図そ
拾遺　榊多ふ多れ書とかゝりしこれ八十氏人を多りかゝ
天平　志坂本よ四きぬつのくしろ面とかけよぬきくも神多之　公領
新の部続拾遺の部に神祭之接遣の部に神楽之夫不の部に神祭乃
部まく今ふの榊れの仏りつし榊又神多よ榊とかゝし源多ゆ榊ゆき故四者之

△忌竹さき

日自是以還留不敢來是謂岐神此木歸曰來名戸之祖
神焉已上書○秀賢神代抄曰岐神者道祖神也○或人説
云切の神多ふよ忌竹と云ふ伊弉冉の杖とかゝ八雷と雖き給ひしこと
故神遷座の忌竹と榊と國ゆ又秀賢の説よりこの神幸の名を伝めん

○神代巻曰時伊弉諾尊乃授其杖

○矢數

廿二日太上皇後白河院慶運華王院尊師尋範○帝王編年
記云十七日上皇御願供養三十三間御堂一千一躰千手○百練抄云
安元二年四月二日上皇法住寺殿内建立九間三面精
舎安置千一躰千手観音像被遂供養云是仏像供養也○又曰
兼安二年十一月十七日院御仏服士中正面以南放光
明法印行海御修法之間也○当寺伝記曰抑彼仏像中書とハ大
僧正行慶造給ふ小仏師康慶法眼康永法橋ふ乃右一丈和の千手観音
也千間二面新作二人の造刻すて手餘ハ事中六條万里小路七條大宮の祭名
東造之千体の内二百体新造ふ六八郎要ハ東寺仏師職法中法印運慶定朝

六代後康慶之子也　これと作事ありて法華院寶治二年閏十月二日宮上ありて同御
宮建長二年七月廿四日法華堂を新しくして中堂と造しめ給ふ那
法師の今堂なるべし　十二月廿三日宮寺と給ふ　四月廿三日宮寺と給ふ　名つけ
て蓮花王院と云ふ　仏像　修理しまつる　年八十二歳の時のなり　きち八郎無姓の
運慶の作と伝へ給ふ　千体の内の内作と云ふ　七体宮の仏ゆ
彫まつりたまふ　中堂及びその千体多くは新作也　○拾芥抄曰
治承二年十月廿七日供養号新千躰　○しかるに拾芥の説は仏像
供養のなりやいまだ慶長の時の説なり　七体仏像康平定朝
（六代康慶也）　千体観音並びに八部衆を作り給ふ　七体仏像康平定朝
と世に云ふ　二十万貫　一万貫毎に豆腐一丁　一万貫毎に豆腐一丁
術と誠ると矢数と称す　近者　彦根八の書　毎年毎日
の分百万貫と数ふ　八幡の書　毎年毎日
射の人と射の人と　毎年毎日
射の人　二十万貫と通し作る　年始まり今世に術と唱ふ　武人
に術と来迎の石塔回り集る　中尾紀伊の国より多く遠射の人

出で立ちと清ふ　通矢の天下一と称す　則
ちなり　孫と偽りて名を矢数の門主の作家人
杉井氏は豊と作し　今堂に楼と　毎年その度毎に
と号　筆て通矢の説　又　紙に記して書の長桿　一紙　二十五日　廿五日
通矢数の説　懐紙　懐紙　懐紙　懐紙　懐紙　懐紙　懐紙　懐紙
答庭　出　数　誠　必　神夏　射　天地和　寒
ゆ　出　数　四　数　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
の内　地　矢　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
○武神　石切鎧軍器考四枝四川流伝　仏五位の図　奥　芝坂伝
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
射　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
矢　八　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

新流の兵軍ゆるれぬと聞くもうい彼法皇に南紀まゐり給ひ隠岐に同隷せ
られ人仲ひく彼の国ゆくこゝあり六十余年流罪ゆる付法皇とゆ
ゆるしの三間と二間とに二十三百まゝたゝれかゝる所をあつもれかゝる所まあ
きのうち勢とゝたあさ光とゆのひく彼の御壹の流まゆ乃芝の上まひさ
ゆいき所く先例のまゝ考る射くちゝる所壹二くけまあゆうて射ゝゝ一つ
壹の縁のまゝ所くゝ小き根をけゝ矢ゆ卯しゝて射の下と射ゝ所ゝ
七箭とあやまゝ所ゝ壹北四と射通して射る矢ゝ射法壹のゝけまゝ彼ゝき
けるゝ保元の日記ゆ見ゝゝ所ゝ代と所て法文禄の所ゝ東山新熊
野なゝ新宮の前の所あゝゝ山ゆ射れ保しと
ゆゝて射けるとゆまて考まゝ小松の三塚ゆ白ひく壹矢射るけ壹れ
壹射ゝゝて彼保ゝゝ所ゝまゝ矢射ゝゆゝ所ゝ矢の数
多射ゝゝゝと及ゝ廣長壹二間十九ゆ彼ゝ流ゝゝ壹 嘉応二年
矢く平一箭の矢射通ゝて所ゝ射ゝゝ所ゝ
彼流ゝゝ壹行林と所ゝ才子ゝゝ